

## 11. 徳島の盆おどり（内的印象記）



著者：W.de モラエス、1916 年発行

訳者：岡本多希子

講談社学術文庫、1998 年発行（絶版）。ことのは文庫、2010 年発行（徳島のモラエス館にて販売中）



### （1）前書き

パトリック・ラフカディオ・ハーン（1850.6.27-1904.9.26）は、ギリシャ生まれのアイランド人で、日本と日本文化を欧米に紹介したことで有名である。彼は米国に移住して新聞記者となり、1890年に松江中学の英語教師として来日した。彼は日本に魅了され、1891年には松江の士族の娘・小泉セツ（1868.2.4-1932.2.18）と結婚して小泉八雲と名乗り、1896年には日本に帰化した。

ヴェンセスラウ・ジョゼ・デ・ソーザ・モラエス（1854.5.30-1929.7.1）は、リスボン生まれのポルトガル人で、彼も日本に魅了され、日本と日本文化を欧米に紹介したが、現在の日本ではハーンほどの知名度はない。

モラエスは、海軍軍人としてマカオ在勤中に、公務のため来日を繰り返すうちに日本に魅了された。彼は1899年に海軍中佐のまま、ポルトガルの神戸領事に就任した。神戸では、福本ヨネという愛人を得て、生涯でもっとも心やすらかな日々を過ごしていた。ヨネは徳島出身の芸者で、心優しい美人であった。しかし、彼女は病身で、1912年に病死した。時に、ヨネは38才、モラエスは58才だった。

ハーンの結婚生活は堅実で、彼の子孫は日本で繁栄している。一方、モラエスの結婚生活はハーンより不安定であったので、モラエスは老後の苦労が多かった。

1913年7月にモラエスは突如、神戸領事を辞職し軍籍を離脱して、亡きヨネの墓がある徳島に隠棲し、ヨネの姪・斉藤コハル（19才）と暮らしはじめた。なお、モラエスはコハルとの同棲を、母国のポルトガルには内密にして、「徳島で女中を雇用している」とのみ伝えていた。

モラエスは、マカオと神戸に滞在中に、母国の新聞や家族や友人などに日本紹介の記事や手紙を沢山書いていた。それらは、「極東遊記」（1895）、「大日本」（1897）、および「日本通信」（1904、1905、1907）の本として纏められ、ポルトガルではモラエスの作家としての人気が高まっていた。モラエスの唐突な徳島隠棲は、理解に苦しむ奇矯な振る舞いとして、母国では様々な憶測を呼んだ。

「日本通信」の出版は、「ポルト商報」という新聞の編集長であったカルケージャの尽力による。彼はモラエスに、徳島暮らしの印象記を「ポルト商報」に掲載することを依頼してきた。モラエスはカルケージャの要望に応じて、1914年3月5日から1915年10月3日まで、68編の記事が「ポルト商報」に掲載された。それらの記事を本にしたのが本書（徳島の盆踊り：ポルトガルで1916年に発行）である。

私（本感想文の筆者・林久治）は、2013年5月に、郷里の徳島市に一時帰郷し、眉山山頂にある「モラエス館」を久しぶりに訪問した。そこで、「孤愁」という題の「モラエスの伝記」が最近出版されたことを知った。「孤愁」（以後、本Ⅰと書く）は新田次郎の未完の絶筆を、残された資料やメモを参考にして、次男の藤原正彦が後半を書き継いで、2012年に出版されたそうである。

本Ⅰの他に、「モラエスの伝記」の主な本は、佃實夫の「わがモラエス伝」（1966年に出版。以後、本Ⅱと書く）と岡村多希子の「モラエスの旅」（2000年に出版。以後、本Ⅲと書く）とがある。私はこれらの三冊の本を読み比べて、読書感想文を本HP上で書いた。（第8回に本Ⅰ、第9回に本Ⅱ、および第10回に本Ⅲの感想文を書いた。）

私は本Ⅱを出版直後に購入していたが、現在では絶版になっている。本Ⅲは学術的に正確な本であるが、そのうち絶版になると予想される。本Ⅰは大変読みやすく書かれているので、文庫本として残ることが期待される。これらの三冊の伝記の中で、私は個人的には本Ⅱが好きである。なぜなら、モラエスの苦悩がよく書かれているからである。本Ⅰは、NHKの大河ドラマのように、主人公のモラエスを美化しすぎており、どこまでが史実で、どこからが新田・藤原の創作であるかが、不明瞭である。

今回（第11回）は、モラエスの著書「徳島の盆踊り」（以後、**本書**と書く）を読んで、その読書感想文を掲載することとした。本書は「講談社学術文庫」で1998年に発行されたが、現在は絶版中である。本書は、「ことのは文庫」で2010年に再発行され、徳島の「モラエス館」又は発行元（<http://www.bungakushodo.jp/>）で買うことが出来る。なお、本感想文では、私の注釈や意見を青文字で記載する。

## （2）本書の舞台：大正時代と昭和初期の徳島市

本書の感想文を書く前に、本書の舞台となった、大正時代と昭和初期の徳島市を簡単に説明しよう。図11.1に、昭和初期の徳島市の鳥瞰図を示した。

（本文は、4ページに続く）

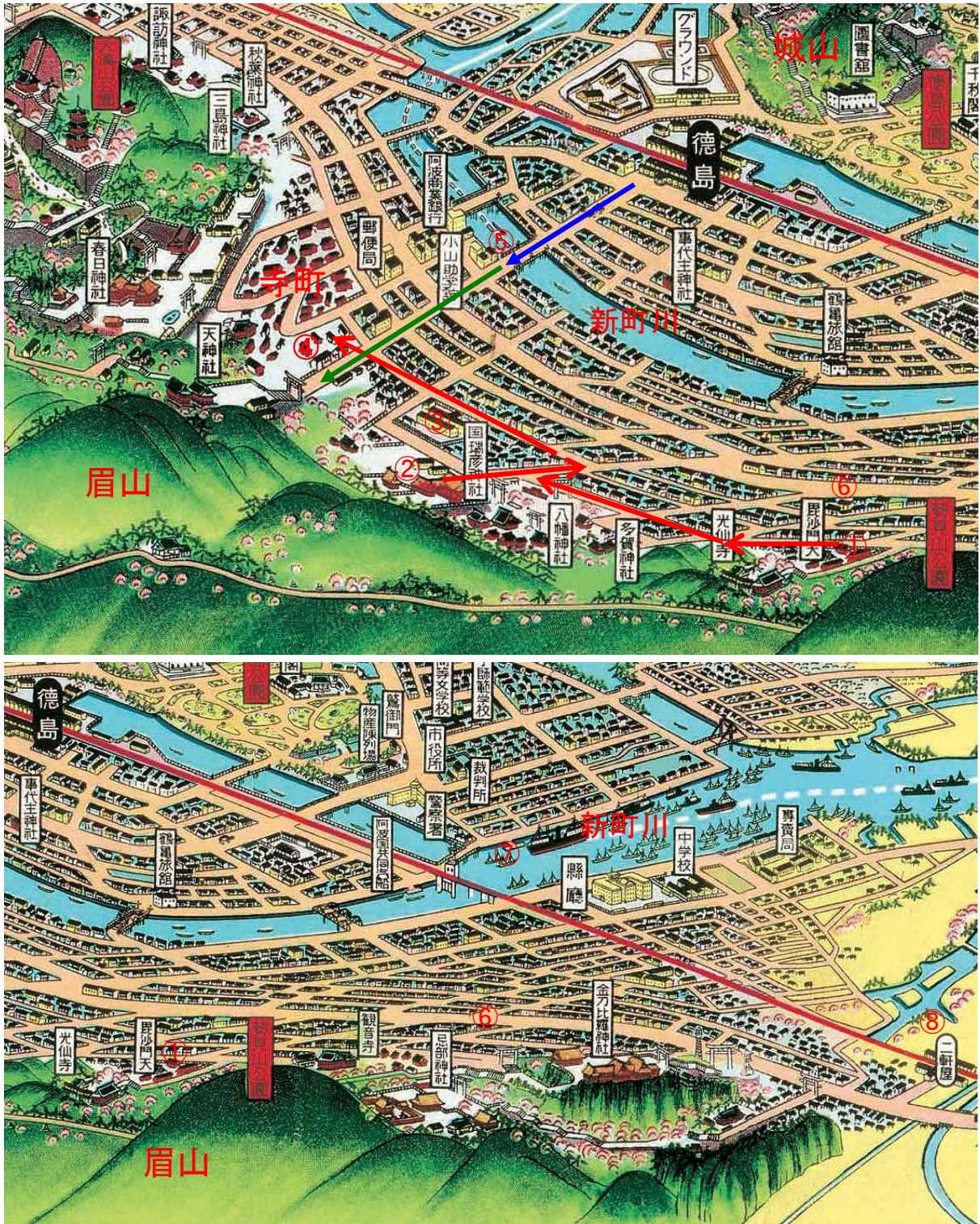


図 11.1 昭和初期の徳島市の鳥瞰図。上：徳島市の中心部。下：徳島市の南部。

上図：徳島市街は、吉野川の支流である新町川の両岸に展開している。市街の東端は海（紀伊水道）で、西端は山（眉山）である。新町川に架かった新町橋（⑤）が市の中心地である。城山の麓にある徳島駅から新町橋までの通りが**西横町**（上図の青い矢印）で、新町橋から眉山の麓にある天神社（現在のロープウェイ・眉山山麓駅）までの通りが**新町橋通り**（上図の緑の矢印）である。繁華街は、**西横町**とそれに直交する通町や八百屋町、**新橋通り**とそれに直交する東新町や西新町や船場町であった。眉山の麓には、多数の神社や寺院が配置されている。寺院には墓地があり、おびただしい墓が眉山の麓にある。

モラエスは本書で、(p. 59-60) 「1913年(大正2年)7月4日の午後、船をおりて私のために用意されていたごくささやかな住居(図11.1の場所①)に歩いていった。旅に疲れ、病気でいささか衰弱してゆっくりゆっくり歩いて行く二軒屋の長い道……。」と書いている。明治末に、徳島近郊に小松島港が建設され、神戸と小松島間に大型貨客船が就航するようになった。午前10時に神戸を船で発つと、夕方に小松島に着いた。同じ船が、夜に小松島を発つと、早朝に神戸に着いていた。その逆の航路があり、神戸と小松島は一日2往復の定期船で結ばれていた。

1913年4月には、徳島と小松島港とを結ぶ鉄道が開通した。本Ⅲによれば(本Ⅲのp. 238)、モラエスは神戸から船で小松島港に着き、小松島港から徳島行きの汽車に乗り、徳島駅の一つ手前の二軒屋駅(図11.1の⑧)で汽車を降り、二軒屋駅から「大道」(図11.1の⑥)を歩いて伊賀町の住居(図11.1の①)に着いたのではないかと推測している。

本Ⅰによれば、(本Ⅰのp. 584-586)モラエスの住居とは徳島市伊賀町3丁目(図11.1の①)に新築された2階建て4軒長屋の南端であった。1階の格子戸を開けると、1畳の三和土(たたき)と3畳の和室があり、その奥に6畳の居間と2畳の台所があった。2階は8畳一間であった。1階に**女中**(実は、愛人の斉藤コハルであるが、本書は(p. 180)、「徳島に来て同時に、家事をしてもらうのに女中を一人雇い入れた」としか書いていない。)が住み、2階をモラエスの居室兼書斎とした。2階の西の障子を開けると、蜜柑畑の向こうに眉山が見え、東の窓は裏庭に面していた。モラエスはこの明るい2階が非常に気に入った。(勿論、便所は1階にあったが、当時の徳島の長屋には風呂場はなかった。)

徳島市街の概要は、図11.1の説明文に記載した。ここでは、モラエスの住居(図11.1の①)があった伊賀町の周辺を説明しよう。図11.1の⑥が、「大道(おおみち)」の大通りである。「大道」は徳島市内から徳島県の南部地方に通じる幹線道路で、道幅の広い通りの両側には、生活用品を販売する各種の商店が軒を連ねていた。「大道」と眉山の間には、道幅4m長さ600mくらいの狭い通りが3本並行している。それらは、「大道」から眉山方向に、「幟(のぼり)町」、「弓町」、および「伊賀町」と呼ばれている。

「幟町」、「弓町」、および「伊賀町」は現在では、徳島市で随一の最高住宅街となっている。しかし、江戸時代には、その名称が示すように、徳島藩の藩隊、弓隊、および忍者隊などの最下級の武士(所謂、足軽)がまとまって住む地区であった。モラエスが住んだ大正時代や昭和初期には、この一帯は江戸時代の名残を残しており、家々は小さく、各々の庭には蜜柑や栗などの果樹が植えられていた。そのため、この一帯は「緑一色」(p. 61)であった。なお、モラエスは「伊賀町」を、「栗の毬(イガ)の町」と誤解していた。(岡村訳「おヨネとコハル」のp. 85)

モラエスは、本書の「41章：徳島を隠棲地とした理由」で、(p. 192)「その理由は、亡き**かわいそうな人**(愛人の福本ヨネ)の墓のそばで彼女を追慕するためである」と述べている。モラエスが大金をかけて建てた「福本ヨネの墓」は天神社の下にある潮音寺(図11.1の④)にある。彼の家(①)から福本ヨネの墓(④)に行くには、図11.1の上図に示した赤い矢印の道順で行く。まず、自宅(①)より伊賀町を北上して瑞巖寺(②)の前の通りを右に曲がり、次に左に曲がって新町小学校(③)の前の通りを真直ぐに行けば、歩いて20-30分で着くことができる。

瑞巖寺(②)は徳島市で随一の名刹で、広い境内には、四季折々の植物を楽しむことができる。新町小学校(③)は悪童の巣窟で、男の子はモラエスにいたずらをし、女の子まで混じって「毛唐、毛唐」と囃し立てたそうである。(本Ⅱのp.23)潮音寺(④)のある寺町には多数の寺院がある。寺町の向こうには、眉山の一部を遊歩道にした「大滝山公園」があり、当時は徳島市で随一の観光地であった。(しかし1945年7月4日に、「大滝山公園」は米軍の徳島空襲で破壊され、現在は寂れている。)この一帯を、モラエスはよく散歩した。(p.297)



阿波踊り宣伝パンフレット(昭和9年) 林鼓浪画

図 11.2 昭和9年の、「阿波踊り」の宣伝パンフレット。

モラエスは本書の第1章で、本書の題名を「徳島の盆踊り」とした理由を次のように書いている。

①運命は私を徳島に投げ入れた。数日ではなく何日も何日も。ここで私は暮し、ここでおそらく死ぬであろう。ここで私は暇な時間に気晴らしにこの内的随想ノートを書くことを思いついた。

②数ヶ月前、夏の晴れた日に「徳島の盆踊り」を見た。古典的な輝きにあふれ、あらゆる死者に捧げられた祭りらしい神秘的熱狂につつまれていた。その数日間、生者と死者はこの世で特別の友愛の日々を過ごし、誰もが、霊となって短時日家族のもとに帰ってくる亡くなった愛しい人々をいつくしむ。何も分からない憐れな闖入者である私も周囲の雰囲気誘われて、幾人かの亡くなった知人たちを思い出す。

③おそらく私はあと一年、二年、三年、何年だか分からないが、ここで「盆踊り」を目にし続けることになる。そしてそのあと、きっと遠からぬうちに、私が目にする事のない「盆踊り」が町の街路を活気づける年が来るであろう。

④そのとき、現世の棲家であったあわれな亡骸をここに脱ぎ捨てにやってきた異邦人としての私の苦悩に満ちた魂は、仏陀が心からお認め下さるかとはともかくとして、この篤信な祝祭の一部にあずからせてほしいと求めるかも知れない。

現在は、「徳島の盆踊り」は「阿波踊り」と呼ばれて、全国的に有名である。しかし、モラエスが徳島に住んだ大正時代や昭和初期には、「徳島の盆踊り」は徳島では賑やかに行われてはいたものの、モラエスが本書で書いているように本来の目的を逸脱していなかった。

「阿波踊り」の名称は、徳島の画家で郷土史家の林鼓浪が、昭和9年ころに徳島商業会議所に提案して、日本全国に宣伝を始めたことに由来する。しかし、「阿波踊り」は日中戦争の勃発で中止になり、時々踊りが許されていたが、「阿波踊り」の隆盛が本格的に始まったのは昭和24年ころからである。

### (3) 随筆文化について (2-8章)

モラエスは「日記と随想は、書き手にとっては、印象を書き留める、心に浮かび、たちまち消えてしまう束の間のおもいを引き止めるので、大変楽しいことである。」と書いている。(p. 24-29)

モラエスの時代には、土佐日記、枕草子、その他のもっとも著名な随筆のフランス語、英語、ドイツ語訳が既にあった。何点かが、彼の机の上ののっていた。

(p. 30) (なお、彼の日本語に関しては、カタカナしか読み書きできず、日本語の読書は翻訳に頼っていた。) モラエスは本書で、「2章：日本の随筆文学」、「3章：土佐日記」、「4章：枕草子」、「5章：鴨長明」、「6章：方丈記」、および「7章：徒然草」の解説を分かり易く正確に述べている。

モラエスは「方丈記」を特に好んでいた。彼は、「方丈記は、平素の楽園のような光景を地獄に変えてしまった数々の災厄の率直な、痛ましい記述である。また穏和な仏教信仰について語り、小さな庵のまわりの風景を趣き豊かに描いた心楽しい記述でもある」と紹介している。(p. 41)

モラエスは、長明の隠遁生活を理想としていた。彼は、「人々は水の泡のように、朝に生まれ、夕べに死ぬ。これらの人々はどこから来て、どこに行くのか」という長明の思想に共鳴し、「俗世の享楽から解脱し、自分の住むみすぼらしい小屋を深く愛する」という長明の生活を真似ていた。(p. 42-47) しかし、彼は「長明の質素な小屋とは全く異なる宮殿に私は住んでいる」と書いている。(p. 129)

### (4) 徳島考 (9-26章)

モラエスは母国の読者に、「私が住んでいるこの土地、私が死ぬこの土地、徳島のことを知ってもらいたい」と記事を書いた。本Ⅲは、(本Ⅲの p. 221、p. 242)、「モラエスには生れつき神経症の痼疾があり、最愛のヨネの死により、もともと不安であった健康についての自信をすっかり失って、死期が迫ったことを予感した。彼は、徳島隠遁はせいぜい数年間と思っていた。しかし、公務からの解放と徳島の気候がうまく作用し、体調が回復した」と書いている。

モラエスは「9章：徳島の印象」で、「徳島は、一見したところ、日本の他の地方都市と異なる顕著な特徴をもたない地方都市である」と書いている。しかし、彼

は「夏の晴れた日の午後、船をおりて私の住居まで歩いて行ったときに受けた、徳島の第一印象は、これ緑…という圧倒的な、だが快い印象であった！なぜなら、私の弱り切った精神とは決定的に相容れない文明化され偽りの外見で飾った都会の生活とは、まったく無縁の田園の簡素な風景を前にして、私は独立、自由、平安の無言の暗示によって純化されていた」と述べている。(p. 59-61)

モラエスは、慈悲と恩寵の雰囲気につつまれて、通りすがりの人々に思わず微笑みかけた。彼らも微笑み返してくれたので、モラエスは心やさしい挨拶と解して感謝した。しかし、後で彼が知ったのは、「無愛想で保守的な徳島人は白人を心底憎悪しており、彼らの微笑みはグロテスクな私という見本が代表している白人に対する軽蔑と反感を表していた。顔の半分をおおう私の長いもじゃもじゃの髭が、髭のほとんどないさっぱりした顔に立ちまじって、私をいっそう滑稽なものにしていた」ことであった。(p. 61-62)

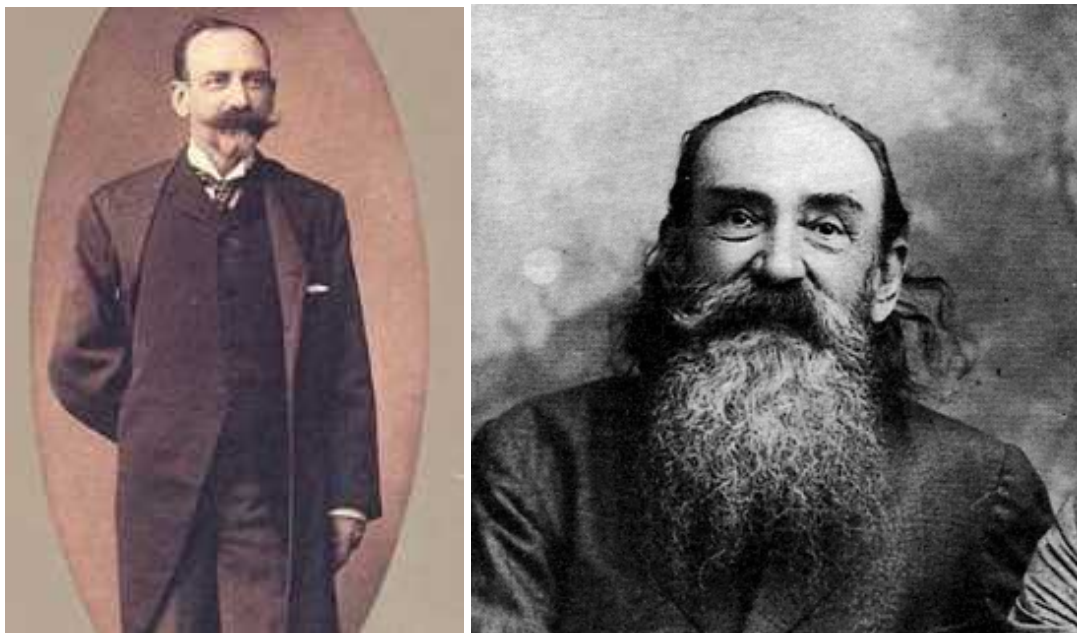


写真 11.3 モラエスの風貌：左は神戸領事時代、右は徳島時代。

「10章：徳島市概観」で、モラエスは徳島の地形、産業、町並みなどを紹介している。特に彼は、「繁華街の奥には住宅がたくさんあり、菜園、果樹園、稲田が散在している。そしてその先には山々が連なり（眉山のこと）、山々は生い茂る植物群におおわれ、その中腹まで見事な神社仏閣とおびただしい数の墓が密集している。徳島は、何よりも先ず、神々の町、仏たちの町、死者の町である」と述べている。(p. 65-66)

「11章：徳島城址の風景」でモラエスは、封建領主蜂須賀家の城跡が英国風の公園になっている様子を紹介している。「12章：伝統的な町のたたずまい」でモラエスは、「徳島には西洋人はほとんどおらず、西洋建築も滅多にない。この地は、真の日本の国の姿を見せてくれる。これは徳島の美点のひとつである」と述べている。本Ⅱは（本Ⅱの p. 194）「当時、徳島市には西欧人はモラエスを含めて3名しか在住しておらず、他の2名は宣教師だった」と書いている。

「13章：住宅・庭園」でモラエスは、「一般住宅のいちばんよくあるタイプは、武士の居宅である。武士は消滅したが、彼らの家にたいする嗜好は残っている。それは、隣家から隔絶した木造の平屋で、木立を優雅に配し、美しい小庭園の神秘につつまれている」と述べている。「14章：石」でモラエスは、「徳島は石を多用し、石の大集積の上に木と紙で出来た家が密集している。たとえ大火により町が灰燼に帰しても、石の価値は残っている」と書いている。（しかし、米軍の徳島空襲で、徳島の石の大集積は表面が焼け焦げでしまい無価値になってしまった。）

「15章：長屋の庭」でモラエスは、「最近建てられた安普請の家や長屋には庭がない。だが、あわれな借家人をあまり深く悲しませないように、住宅の前面に幅1mくらいの小さな自由空間が残してある。これらの庭は、ほかの贅沢の許されない貧しい人たちの家庭にさわやかさと明るさをもたらしている。」と書いている。

「16章：気候・風土」でモラエスは、「徳島では棕櫚の木などの温暖な気候に適した植物が実に多種にわたってよく見かける。他の大都市の言葉づかいと比べて、徳島の人の言葉づかいは、おくれた発達段階にある。例えば、薩摩芋を徳島の善良な人々は琉球芋と頑固に呼び続けている」と述べている。

「17章：没落した武士階級」でモラエスは、「封建制度とともに武士階級が消滅した。働かなければならない大社会層が突如現出したことから生じるのは、怠惰、労働への不適応である。徳島で起こったのはこういうことだった」と書いている。

「18章：まずしい食生活」でモラエスは、「私の隣人たちの中のある家族は、旧武士の74才の老人、その妻、旧武士の息子、その妻と幼い息子の五人である。老人は武士階級が消滅して以来、何の職業にもついていない。家族全員を養っているのは、町の小学校で教師をしている息子である。彼の月給は18円である。彼らは極めて質素に暮らしている。昼食はしばしば茹でた薩摩芋だけである。日本の主食は、純粹に米だけを食べるのは金持ちだけである。貧乏人は米と大麦を財力に応じて混ぜて食べる。貧困層では、米と大麦の代わり薩摩芋や安価な別の食物を主食とする。粗食という点では、この人たちは全人類中で第一位を占める」と述べている。

「19章：時鐘・水」でモラエスは、「徳島で変わっていることのひとつに、時刻の知らせ方がある。日本の大都市では、大砲が正午と午前6時を知らせる。徳島では、多くの神社仏閣で響きの良い青銅の大鐘で昼夜時刻を知らせるための人がいる。もうひとつ変わっていることに飲料水がある。徳島の井戸水は塩分で飲めないので、各戸に出入りの水売人がいる。家に水がなくなると、『水』と書いた木片を玄関にぶらさげると、水売人が来る。」と書いている。「20章：洪水・犬」でモラエスは、「徳島とその近郊では排水が悪く、夏期の大雨でしばしば洪水が起こる。日本でもすべてがバラ色というわけではない。徳島の犬は概して大柄である。彼らは首輪や鎖なしに自由に暮らし、飼い主は犬の世話をほとんどしない。彼らは人間の仲間ではない。用心ぶかく不信感の強い寄食者である」と述べている。

「21章：蚊・美人のタイプ・嫁入り道具・夜なべしごと」でモラエスは、「徳島はとりわけ蚊の国である。蚊はほぼ一年中家族の一員であり、夏の数ヶ月間は真の災厄にさえなっている」と書き、蚊の実態と人の対策をユーモラスに描写している。彼はまた「私が日本の大都会で見てきた人たちよりも、徳島の人たちは顔つきが野卑で醜いように思われる。醜女が圧倒的に多い中に、雑草のあいだにすばらしい花が咲くように、ときとして美しい女性が目につくことがある。小麦色の肌、たぐいまれなほどきらきら輝くつややかな黒い目をした小柄な女性が…」と述べている。



更に、嫁入り行列を詳しく紹介し、西洋ではピアノ音にいらいらさせられるが、「徳島のピアノ」と彼が呼ぶ夜なべ仕事の「はたおり機械」の音にはほろりとさせられる、とも書いている。

その他、モラエスは、「22章：こたつ・行商」、「23章：巡礼・神道と仏教」、「24章：徳島人の信心ぶかさ・天候への関心」、「25章：日本の創世神話」、「26章：日本人の仏教信仰の姿」で、徳島と庶民の生活を母国の人たちにも分かりやすく、かつ鋭い観察眼で紹介している。

#### (5) 身辺雑記 (27-41章)

ここで、モラエスは自分の生活の細々としたことを生真面目に書いている。彼はこの部分で、日本庶民の生活実態を紹介するとともに、自分自身の生活体験を述べている。以下に、章の名称を記載する。

「27章窓外の風景」、「28章：家の内部」、「29章：オランウータン考」、「30章：ふとん・電灯」、「31章：貝と貨幣のコレクション・日本家具」、「32章：ひばち」、「33章：民芸品の美しさ」、「34章：額の絵・死・稲荷神」、「35章：庭」、「36章：庭のしつらえ」、「37章：造園のたのしみ」、「39章：庭の生き物・水場・地蔵尊」、「40章：ペット動物たち・私の境遇と心境」、「41章：徳島を隠棲地とした理由」。



写真 11.4 徳島市伊賀町にあったモラエスの書斎：徳島市眉山山頂にある「モラエス館」に再現されている。（筆者の林が2013年5月に撮影）

(5) の部分で、筆者の林が特に興味を持ったモラエスの記述を以下に紹介する。

①34章：私（モラエス）の家には絵が三つ四つあり、その内の一つは大好きなので是非説明したい。そこには、数匹の蛍が描かれており、一匹の蛍が溺れて死と闘っている。生き物—動物であれ人間であれ—がこの世を去るときの最期の純粋な姿である。ある人が孤独のうちに自分の寝台で死ぬとしたら、事は蛍がこの世から去るとのほぼ同じように推移する。

②35章：中庭は、私の女中と私との共有財産である。そのことが時々、私たちの中でちょっとした争いを巻き起こす。一方の側で、彼女が桶の水でザブザブ洗いものをして、衣類を広げて竹竿に干す。もう一方の側には、ほんの僅かの地面しか私のためには残されていない。そこに、私はいくつかの鉢を並べ、世話をする。

③36章：私は今、厳肅といえるような気持ちで、聖所に入る人の宗教的謙虚さにみちた態度で私の庭に入る。植物を愛する人は何かを信じる。宇宙の調和や運命の公正さを少なくとも信じるからである。苦しむとしても、苦悩する魂の苦痛への得も言われぬ慰撫をこれらの信仰のうちに見出すからである。

④37章：私たちは心の中で言うのだ。「お前もこの花が見られたら…。」この「お前」とは、この世にいないとか、遠くに行った愛する人である。この高揚した気分を知って喜んだりしたいと思う人のことである！造園の楽しみは、老人の大きな慰撫である思い出や追慕に誘ってくれるからである。そして、この世で、老人にならないものがあるであろうか？

⑤40章：私には全半生にわたって幸運の女神の愛情にはほとんど恵まれなかったが、今日では運命に満足し、自分が図った精神的自殺に喜びを感じている。興味ぶかいことに、貧しく孤独な男がこのような生活環境におかれると、彼は自然の力と周囲のあらゆるもの—風景、植物、花、動物—の真価を知りそれらに感動する能力が自己のうちに練磨されるのを感じる。自分のほど近い終わり、つまり個人としての消滅の宿命に毅然たる諦念をもって向き合うべく、できるかぎりの準備をする。

⑥41章：ほんのちょっと前—二年もまだ経っていない—の8月のある午後、ある人が私の手を握りしめて、あることを熱心に求めた。かわいそうな人で、母親や兄弟姉妹、身内が多数いるのだが、誰ひとりそばにおらず、率直に言うと、彼女のことなどほとんどかまってくれない。彼女は、自分の願いを心からかなえようとしてくれる唯一の人は私であるということをよく知っていて、私に求めたのだ、自分の生命を永らえさせて欲しいと。そして、私は彼女の願いをかなえてやらなかった。そうする力が私にはなかった。彼女は最後の力をふりしぼって私の手を握りしめ（今でもその感覚が残っているかだって？…）、死んでいった。

(6) 死をめぐる日本の文化 (42—51 章)

モラエスはこの部分で、特に死者のことを書いた。彼は「まだ生あたたかい遺体から、家族崇拜の対象となる飛翔した霊の神格化まで、死者についての日本人の風習と信仰をざっと述べてゆく。この問題について書かれた書物は少なくないが、それらを参考にしない。しょっちゅう間違えたりするとしても、自分自身の観察、長年にわたる日本人との止むを得ぬ交際の中で見たこと、見ていること、聞いたこと、聞いていることだけに留めたい」と述べている。以下に、章の名称を記載する。

「42章：葬儀の手順」、「43章：死者崇拜」、「44章：死者の霊と生者の関係」、「45章：墓地と墓」、「46章：墓石に刻まれる家紋」、「47章：墓参」、

「48章：墓石への自然の作用」、「49章：戒名・卒塔婆・墓地の魅力」、「50章：仏壇・家庭での祭祀」、「51章：生き続ける死者」。

(6)の部分で、筆者の林が特に興味を持ったモラエスの記述を以下に紹介する。

①43章：死者の霊すなわち魂はどこへ行くのか？日本人のほとんどは仏教教義をはっきりと知らない。日本人はこれを単純化する。死んだ人はすぐに永遠の栄光に入り、「ほとけさん」すなわち聖者になる。「ほとけさん」は生者が自分に寄せてくれるやさしい思いに感謝し、喜んで彼らを保護する。ここから死者崇拝や祖先崇拝が生まれる。

②44章：世慣れた人は、仏教と神道行事のいくつかにときに笑うかもしれない。だが、追慕の情を祭祀に変え、死者を神々に変え、墓や仏壇でそのような祭祀を司る日本の家族の単純な素朴さとやさしい熱意を前にすれば、誰もが感動して頭を下げる。古い衰えた日本人が、自然が人間に課す、一見したところ最も厳しい掟である死を前にして穏やかな諦念にひたっているのは、死者崇拝のおかげである。

③48章：当初、徳島に住みはじめた最初の数週間、目に入る墓のすざましいばかりの多さに驚いたものであった。しかし、徳島は生者の人口の密集した古い町なのだから、同様に死者の人口の密集した古い町でなければならないわけだ。

④51章：死者の霊は年に一度、お盆に自分の家庭に帰ってくる。家族には彼らは見えないが予見できる。生者は先祖の霊をもてなし、ごちそうをする。ここ徳島では、生者は死者のために踊りを踊る

(7) 死についての考察 (52-54章)

「52章：人間の死」で、モラエスは「自然現象の本質についての私たちの理解はまことに不完全ではあるが、しかし、人間の死は自然のすばらしい営みや宇宙の運命の中にあっては無であり、何の重みもない。世界最強の皇帝であろうと、最優秀の科学者であろうと、死ぬ人は、万物の調和を前にするとき、小川の水たまりで誰にも知られず溺れ死ぬ蜚と変わらない」と述べている。

「53章：死がもたらす苦しみ」で、モラエスは「人は自分自身の死の概念にはたいてい苦しまない。(自分の生命の糸が切れようとするのを感じるときに、人が考えることは神秘の闇につつまれている。)愛する人の死に苦しむのだ。その苦しみ方にはふた通りある。悔恨による苦しみと、追慕の苦しみである」と具体的な例を考察しながら書いている。

「54章：日本人の死者崇拝と愛国心」で、モラエスは「死という恐るべき宿命を前にして、日本人の魂と西洋人の魂の間に横たわる主要な違いは、片や死者崇拝が現れ盛んになる、片や痛みの短刀が突き刺さり追慕の情が永続化する。日本人の魂も苦しみから免れているわけではない。しかし、死者崇拝が驚くべき慰撫行為を行う。死者の栄光化を熱心に信じること、家族生活への死者の永遠の参加を信じること、死者の慈悲を信じること、家庭への死者の定期的訪問を信じることは、西洋人には理解できない幸福の広大な地平を現世の生活に切り開くことである。家族の輪を日本人全体、つまり国家に押し広げるならば、すさまじい日本人の愛国心の秘密をある程度理解したことになるであろう」と述べている。

(8) 徳島日記 (55-66章)、カルケージャへの手紙 (67-68章)

モラエスは、「徳島から思いつくことはすべて、あるいはほとんどすべては、軽いおしゃべりの形ですすでに話してしまった。まだ書き残していることは、日常的な

出来事の中でふと気づいたり、徳島周辺での小旅行で感じた折々の印象である。それには、日記形式の方が私の意図によりかなっていると思う」と述べて、次のような章を書いている。ここでは、内容を紹介するスペースがないので、以下に題名のみを記載する。

「55 章：徳蔵寺の藤の花見・ほととぎす考」、「56 章：日本人の伝承的仏教信仰・猫・自然の美しさ」、「57 章：け・とーじん考」、「58 章：明治天皇・端午の節句と雛まつり」、「59 章：御殿女中だった老女のくらし・池田への旅」、「60 章：撫養への船旅と鳴門見物」、「61 章：死者の教えてくれたもの」、「62 章：神戸への旅・徳島隠棲一年で学んだこと」、「63 章：小松島見物・靈魂の力」、「64 章：盛夏のくらし・混血児考」、「65 章：猫の『ゆうかく』・女性のおしゃべり・祭り」、「66 章：カモンイス・世界大戦への日本の参戦」、「67 章：盆まつりをめぐる風習・盆踊り」、「68 章：ふたたび盆踊り・死者への追慕」。

この部分に対する、筆者の林の感想と説明を、以下に少し書く。

- ①モラエスは徳島に移住して、好きな文筆活動と愛妻ヨネの墓参に専念出来るようになって、心身の苦痛が和らいで行ったようである。
- ②モラエスが徳島に移住したのは、まだ 59 才の時であった。従って、心身が回復すると、徳島市内ばかりではなく、徳島周辺にも足を伸ばして見物して回ったようだ。
- ③55 章は、1914 年 5 月 6 日に石井町へ藤を見に行った時の小旅行記である。徳島から石井までは、当時の汽車で 30 分の距離である。
- ④鉄道が徳島から池田まで開通したのは、1914 年 3 月 25 日である。池田町（現・三好市）は徳島から 80 k m 西にあり、現在では「高校野球」で有名である。59 章に書いているように、モラエスは開通早々の汽車に乗って、1914 年 6 月 9 日に池田に行っている。
- ⑤60 章は、撫養町（現・鳴門市）と鳴門海峡の見物記である。徳島から撫養までは、20 k m 弱しかない。しかし、モラエスが鳴門に行った 1914 年 6 月 12 日には、鉄道がまだ開通しておらず、彼は小船で 3 時間もかけて撫養に行った。1916 年 7 月 1 日に徳島－撫養間に鉄道が開通したが、鉄道会社は吉野川に鉄橋を架ける資金がなかった。そこで、徳島の新町橋から連絡船に乗って、途中の中原駅まで行き、そこで撫養行きの汽車に乗り換えていた。それでも、新町橋から撫養まで、1 時間弱で行けるようになった。本Ⅱによれば、（本Ⅱの p. 238）モラエスは 1924 年 5 月 30 日の 70 才の誕生日に、数少ない友人の一人である小出治郎と、汽車で撫養に行き、鳴門海峡まで足を伸ばした。
- ⑥63 章は、1914 年 7 月 8 日の小松島への小旅行である。徳島から小松島までは、当時の汽車で 30 分の距離である。小松島は徳島市民の海のリゾートとなっていた。
- ⑦モラエスが徳島に移住した当初は、心身の調子が悪く、自分の寿命はあと 2－3 年と思っていた。彼は、若い斉藤コハルに死に水を取ってもらうことを当てにしていた。しかし、運命の悪戯か、コハルは 1916 年 10 月 2 日に肺結核で死亡した。享年 23 才。モラエスの方は健康を回復して、コハルの死後は一人で生活していた。次に彼は「おヨネとコハル」という題名の本を執筆した。次回（12 回）は、この本の感想文を書く予定である。

（記載：2013 年 10 月 28 日）